御人形遊び

紅月　時夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
御人形遊び

【Ｎコード】
Ｎ１５３４Ｏ

【作者名】
紅月　時夢

【あらすじ】
クラウドが目を覚ますと、そこは見たことのない広い草原だった！
そこはＦＦ１０の世界。
一体どうしてこんなところにいるのか。クラウドを喚んだのは何故かあの男？！
とんでもなく可愛い姿に変えられてしまったクラウドは、元の世界へ帰るため、体を張ることに！

目を覚ますと、そこは見たことのない平原だった。

「一体、ここはどこだ」

金髪の青年――クラウドは呟いた。
時は少し前にさかのぼる。

昨夜、いつものように仕事を終え、セブンスヘブンへと帰宅した。

「ただいま」

「おかえりなさい、クラウド」

「おかえり！」

中へ入ると飛び付いてくる子どもたち。そして、奥から出てくる女性。

「おかえり、クラウド。今日もお疲れ様」

「あぁ、ただいま。ティファ」

クラウドは子どもたち――――マリンとデンゼルが離れると、夕食を食べに奥へと向かった。

その後はいつものように伝票を整理した後に眠りについた。

極普通の一日だったはずなのに、なのにどうして。

目が覚めると見たことのない平原。空が美しい青空。太陽が高いところを見ると、恐らく今は昼ごろだろうということがよくわかる。

「夢……なのか？」

夢ならば頷けるが、あまりにもすべてがリアルだった。

ぽかぽかした陽気。
こんな状況でなければ昼寝でもしたいところだ。

「クェ――――！！」
「よーしよし、さぁ、今日も行くぞ」

聞こてきた声に振り替えると、そこには見慣れた黄色い鳥と、その鳥に乗る見たことのない男の姿。
ここでいても何も始まらない。
クラウドはあの男にここがとこなのか聞いてみることにした。

「ちょっといいか？」
「ん？何だい、お兄さん。見かけない顔だな。旅の人か？」
「あぁ、そんなところだ」

目が覚めたらこんなところにいました、なんてこと言える訳がない。

「ここがどこだか知りたいんだが…」
「ここかい？ここは“ナギ平原”さ。このスピラ一大きいと言われるあの平原。聞いたことくらいあるだろう？」
「……あぁ」

本当は知らない。

スピラという地名もナギ平原というのも聞いたことがない。
まぁ、正直に言うわけにもいかないだろう。嘘も方便だ。

「どうかしたかい？」
「いや、なんでもない。ありがとう」
「いや、いいってことよ」
そして男は去って行った。なんでも、ベベル…という場所に行くそうだ。
ここはモンスターが出るらしい。素手はキツいが、ここの金はない。どうしたものか。

「グルルルル……」

クラウドが悩んでいると、獣の唸り声が聞こえた。
ハッと振り替えると、そこには彼の見たことのないモンスターがいた。白い毛並みに大いな体躯。鋭い鉤爪に、狐のような顔にある大きな赤い一つ目。

「チッ！」

剣もマテリアもなしに戦うことは無謀だった。少なくとも、力量もわからない相手に素手で戦いを挑むのは馬鹿のすることだ。
幸い相手は今のところ一体。
うまくいけば切り抜けられるかもしれない……が。

「くそ、この爪、うっとおしい！」

長いリーチの上爪も長いため、繰り出される攻撃をよけても、えぐ

れた地面の砂や石が飛んでくる。
どれだけ避けても敵の攻撃の手がゆるむ気配はない。
そして、とうとうモンスターによってえぐられた地面に足をとられ、クラウドは転倒してしまった。

「しまっ……！！」

反射的に腕を顔の前で交差させ受け身の体制をとる。モンスターが大きな鉤爪を振り下ろす。

「サンダガ！」

聞こえてきた声とともに大きな雷がモンスターを襲う。モンスターは声をあげる間もなく黒く焼け焦げて崩れおちた。
その骸からは、緑や赤の珠が光の尾を引きながら消えていった。

「助かった。ありが……」

振り向いて声の主を見たクラウドは動きを止め絶句した。

どうしてお前がここにいる。

そう言いたかったが声が出なかった。
そこにいたのは、あり得ない人物だった。

「どうやら怪我をしてはいないようだな」

声の主は目の前で固まっているクラウドを見ながらそう言った。

「おい、いつまでそうしているつもりだ、クラウド…」

その呼び掛けに我にかえったクラウドは開口一番に叫んだ。

「どうしてお前がここにいるんだ！セフィロス！！」

声の主――――セフィロスはその言葉に不適に笑う。しかし、どうしても格好がつかなかった。それは、手に持っているものが原因だろう。

「さぁ…何故だろうな？」

「それにその、手に持っている……サボテンダーのぬいぐるみは何なんだ！」

そう、セフィロスは腕の中にサボテンダーのぬいぐるみを抱えていたのだ。

「可愛いだろう」

「まぁ、確かにそうだが…って今はそうじゃない！！質問に答えろ。どうしてお前がここにいる。そして、どうして俺がここにいる！！」

一気にまくしたてるクラウド。さっきでの冷静さはどこへやら。どうやらサボテンダーのぬいぐるみを持ってのセフィロスの登場に、かなりの衝撃を受けたようだ。

「まぁ、私がここにいることは放っておけ」

「……」

自分勝手過ぎるだろうという言葉を飲み込んで、セフィロスの言葉の続きを待つ。

経験上、セフィロスは人の話を聞きはしないということを知っているからだ。

「この世界にはルールという黒魔術を使う女がいるのだ。そいつが人形を操っているらしいから、その力を真似たのだ」

結構簡単だぞ、と続けたセフィロスに、クラウドは開いた口が塞がらない。そんな真似が出来るのは、間違いなくこの男だけだ。

「それで…どうして俺はここにいる」

頭痛をこらえつつクラウドは再び問い掛ける。

「それはだな、私が呼んだからだ」

「……」

なんとなく予想していたとはいえ、あまりのセフィロスの理不尽さにクラウドは益々頭痛が酷くなったのを感じた。いや、セフィロスが理不尽でなかったころなど恐らくありはしないだろうが。

もう、自分勝手すぎる目の前の男に呆れるしかない。

あぁ、どうでもいいから早く俺を帰してくれ…。

心底思うクラウドは脱力し、げんなりとしていた。

「さて、クラウド」

「…？」

相変わらず痛みの走る頭を上げると、不適に笑うセフィロスが目に入った。

――――ゾクリ……

背筋に悪寒が走る。

足が震えそうになる。

今から、何かが起こる。

とてつもなく嫌な、何かが起こる。

「今、お前を助けた礼だが、体で払ってもらおうか」

「……は？」

なんとも間抜けな声が発せられた。

セフィロスが近づいてくると同時に、クラウドもジリジリとあとずさる。だが、さっきの戦闘によって作られた穴に再び足をとられてしまい、バランスを崩す。

「くそっ…また！」

再び転倒しそうになったが、セフィロスに右腕を掴まれ回避された。
クラウドが見上げると、そこにはセフィロスの相変わらず不適な笑み。しかしその目はしっかりと輝いているように見え、クラウドの口元は引きつった。
直後、両目を手の平で塞がれてしまう。
逃げようにも腕を彼の利き腕で掴まれているため、どうしても振りほどけず、逃げられない。目から腕をどけようとしても、びくともしない。

「何を…！」
「言っただろう。体で払ってもらうと…」
「！！」

そしてクラウドの目の前は真っ白になり、体からは力が抜けていった。

体が不思議な浮遊感と温もりに包まれているのを感じながら、クラウドは目を開けた。
少しボーッとしている頭でゆっくりと周りを見る。何故か隣にサボテンダーのぬいぐるみがいた。
緑の草原。場所は相変わらずナギ平原のようだ。

「起きたか…」

不意に頭上から聞こえてきた声。
ボーッとした頭のまま見上げると、そこにはセフィロスがいた。そして頭が覚醒し、今の状況を理解する。
今、自分はセフィロスの腕の中にいるのだということを。
そのことで混乱し、何故抱えられることが出来ているのかなど、その頭にはなかった。
暴れて抵抗を試みるも、がっちりと抱えられており、無意味に等しい。

「暴れるな。それにしても…ふむ。中々可愛いものだな」

その言葉にクラウドの動きが止まる。嫌、固まったと言った方が正しいだろう。
そしてようやく考えつくのだ。何故セフィロスが自分を抱えることが出来ているのかということに。
おそるおそる自分を見下ろす。しかし、セフィロスの腕で見られなかった。なので、手を見る。

「！！！」

見たはずの手は、仄かに金色に輝く黄色の羽となっていた。その羽で顔を触ると、明らかにそこにあるのは鳥の頭のようだった。
そう、クラウドは……

「やはり正解だったな。お前を“チョコボ”のぬいぐるみにしたのは」

チョコボと化していた。

「――――――！！！」

何をしてくれるんだ！！！

クラウドはそう叫んだはずだった。実際茶色い嘴も開いている。しかし、声が出なかった。

唖然とするクラウドの様子を見たセフィロスは笑いながら言った。

「ぬいぐるみだから話すことは出来ないだろう。しかし、そうだな……こうするか」

そしてクラウドの頭に手を置くと、クラウドの体を青白い光が包み込んだ。

「さて、これで話せるな」

「クェ？」

は？と言ったはずの言葉。それが可愛いらしいチョコボの鳴き声と化していた。

「……」

自分の口から出た鳴き声にクラウドは固まる。

「やはりな。その姿にはそれが合う。さて、ではそのまま私の従順な手足となって働いて貰おうか」

「クェ！？（はぁ！？）」

「そうだな。まず私の部屋の掃除でもして貰おうか。この近くに宿

をとっているのでな」

「クェ、クェックェ――！（お、降ろせ――！）」

暴れるクラウドは憐れ、セフィロスに連れていかれるのだった。

「それでは、やって貰おうか。クラウド」
「……」
もうげんなりとしたクラウドは一度部屋を見渡した。
広さは今のクラウドから見ればかなりのものに感じる。普通の宿の一室だというのに。
「クェ…クェックェークェ（でも…宿なのに俺がするのか）」
ため息を吐き出して脱力する。
もうセフィロスからは逃げられないだろう。それにセフィロスは言

った。

『しばらく働いてくれれば、元の世界に戻してやる』

と。真実かはわからないが、今はセフィロスしかいないのだ。
だからクラウドはもう諦めていた。

「さぁ、先ずは箒だ」

ソファーに座って本を開き、相変わらず腕にサボテンダーのぬいぐるみを抱えているセフィロスは、部屋の角を指差した。そこには小さな箒があった。それを使って掃除をしろということだろう。

「クェー…」

大きくため息を一度ついて、クラウドはとぼとぼと歩いて箒を取り、掃除を開始する。
元々クラウドが掃除はきちんとしないと納得しない性格だったのことで、隅からきれいに掃いていく。しかし、クラウドにとっては災いし、長い掃除となった。
セフィロスはそれを視界の隅に入れつつ本を読んでいた。
そして、クラウドが部屋を掃き終わると、ようやく顔をあげた。

「中々綺麗になったな」

「……」

小さな体には重労働だったのだろう。えらそうだ。

「では次に…」
「……」
その言葉に恨めしそうにクラウドは、椅子に座るセフィロスを見上げた。
「片付けをしてもらう」
「クェクェ…（片付け…）」
自分やれ、と言いたくなるような内容だ。
「さぁ、クラウド。その箒を片付けたら私の言う通りに動いてもらうぞ」
セフィロスの言う通りというところがクラウドには癪だったが、何も言わずに取り掛かる。
「その本はあの棚」
「ゴミはちゃんと分別だ」
「そのボールは知らん。棚の奥にでもしまっておけ」
「服は綺麗に畳んでからしまえ」
「布団も直ぐに寝られるようにしろ」
等々……と、永遠に続くかと思われた責め苦だが、ようやく終わり

を迎えた。

「よし、こんなものだろう」

セフィロスは清々しい笑顔で部屋を見回した。その隣にはしゃがみこんで荒く息をつくチョコボ、基クラウド。

「さて、次だが」

「クェークェクェ！（まだあるのかよ！）」

思わず突っ込むクラウド。だが、反抗したいのをグッと押さえ込む。帰るにはセフィロスの力が必要なのだ。

「私の肩を揉んでもらおう」

「……」

ニヤリと笑って、セフィロスはそう言った。

「ク、クェークェ（か、肩揉み）」

もうセフィロスはクラウドの反応を見て楽しんでいるに違いない。実のところ、セフィロスにはクラウドの言っている言葉はわかっているとか。

「あぁ、そこだ。中々いい気分だな」
「……」
無言で、ただ早く終わらせたい一心だけで肩を揉むクラウド。
傍から見ればチョコボのぬいぐるみが肩を揉んでいるのだから、可愛らしい限りである。
セフィロスは実に気持ちよさそうだ。クラウドは内心「こいつ、肩凝り過ぎだろう」と思っていたとかいないとか。
それにしても、セフィロスは今にも眠ってしまいそうな勢いだ。余程気持ちがいいのだろう。
しばらくして、クラウドはセフィロスに呼び掛けた。
「クェ、クェークェクェ。クェックェークェ？（おい、セフィロス。まだやるのか？）」
しかし、反応がない。呼び掛けに全く応じないのだ。
「クェークェクェ？（セフィロス？）」
反応はない。
クラウドは肩を揉むのを止め、セフィロスの前に回り込むと、顔を覗きこんだ。
「……クェクェ（寝てる）」

セフィロスは、眠っていた。
凄く気持ちよさそうな顔をして。

「……」

俺はどうすればいいんだ！！
クラウドは頭を抱えた。この世界から戻るには、間違いなくセフィロスの力が必要だ。しかし、当のセフィロスは眠ってしまっている。戻れないのだ。

「～～～～！！」

頭を掻き毟るがどうにもならない。
直後、急に何かに引っ張られた。

「クェッ？！（なっ？！）」

驚くも既に遅し。
クラウドはセフィロスの腕に閉じ込められていた。抜けだそうにもがっちりと抱えられて不可能だった。
クラウドは、サボテンダーのぬいぐるみと共にセフィロスの抱き枕と化した。

「……」

どうにも現状を打破出来る気はしない。
恐らくセフィロスが起きるまで無理だろう。そして、セフィロスが起きる気配はさらさら無い。

「クェー…」

ため息を吐き、大きく深呼吸した。
その時、薔薇のような甘い香りがした。

「？」

少し周りを見るが、最終的にセフィロスの髪からだと気付く。
納得したクラウドは眠気に襲われた。疲れが回ってきたのだろう。
小さな体にはキツい重労働だったはずだ。そしてこの柔らかな匂い。
クラウドの眠気を誘うには十分だった。

「クェ～」

大きなあくびを一つすると、クラウドはそのまま夢の世界へと旅立ってしまった。
その頭をセフィロスの腕に乗せて。

「…ラ……ク…ド……クラ…ド」
「……？」

聞き覚えのある声に呼ばれ、彼の意識は浮上した。
目を開けるとそこにいたのは

「あ、クラウド起きた！」
「……マリン？」

視点をさまよわせると、そこはいつも通りの自分の部屋だった。

「夢……か」
「クラウド？」

ポツリと呟くと、マリンの隣にいたデンゼルが首をかしげた。

「いや、何でもない」

夢にしてはあまりにもリアルで嫌だったと思いながら、クラウドは起き上がった。

「ティファが朝ごはん出来たって」
「だから、クラウド起こしてこいって言ったんだ」
「そうか」
クラウドは頭から夢のことを追い払いつつベッドから降りる。
「っ！！」
その時、クラウドは顔をしかめた。しかし、子どもたちは既に背を向けていたため気付いていない。
ホッとしつつ、クラウドはゆっくり立ち上がった。

――――ズキッ！

体のあちこちを痛みが走る。動けないほどではないにせよ、結構痛い。
それでもクラウドは平静を装って歩き出す。
その時、一瞬薔薇の甘い香りがしたような気がした。

「気のせい…気のせい……」

クラウドは必死に自分にそう言い聞かせ、下へと降りて行った。

真実は、セフィロスだけが知っている。

e
n
d

（後書き）

ギャグ小説でしたが、いかがでしたでしょうか？

クラウドを喚んだのはまさかのセフィロス！
何故お前がここにいる！
と、私も書きながら思い、クラウドに思い切り突っ込んでもらいました（笑）

チョコボのぬいぐるみになったクラウド、私が欲しいです。ずっと抱き枕状態。抱えて放さないからきっとクェクェ怒られるんだ。

ぬいぐるみを抱えて眠るセフィロスが可愛いとか思ってます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1534o/

御人形遊び

2010年10月10日14時39分発行